

図書ニュース

大阪府立北野高等学校図書館

第2号

2015.7.10発行

はじめに — 分厚い本

ある人の読書には傾向がある。それは年齢だったり、置かれている状況や社会的な地位などによっても違ってくる。そこで、愛読書<どんな本を読むか>がアイデンティティー<人となり>の一面を表すことになる。

先日、本校の六稜祭の演劇バトルでこんな場面があった。その劇は父親(パパ)と娘(女子高生)が交通事故に巻き込まれて、衝撃から目覚めるとお互いの人格が入れ替わってしまっていたことから始まる。途中、女子高生、つまりパパが言う台詞の中に「愛読書はシバリョー」というのがあった。聞いた瞬間に、ウーン、シバリョーかぁ…と思った。絵文字ならば(°_°)という感じか。パパ(オヤジとその世代)が象徴された「シバリョー」は、女子高生にはやっぱり不似合いに見えた(失敬!)。この親子関係の文脈からは「**司馬遼太郎全集**」を高校生にすゝめたとしても、単にギャップの証明になるだけじゃないかと内心弱気になる。

でも、遠く大学時代のことを思い出してみた。教育社会学を専門とされるT先生のゼミに所属した時のこと。今ではごく名の知れた学者であり、当代一の本の読み手の一人といってよい先生から、私たちゼミ生はある本 — 鹿野政直著『資本主義形成期の秩序意識』という本 — の輪読を指示された。T先生は年齢や知の蓄積のギャップに関わらず、ご自身の研究成果について惜しみなく学生にもぶつける方で、当時の研究過程の一端に君らも仲間として加わってほしいくらいのお気持ちがあったように思う。その時、「今後君たちがこれほど《骨とボリューム》のある本を読む機会は少なくなるから、この際(学生時代に)一度取り組んでみるとよい」という勧め方をされた。お蔭でそれまでに読んだことのないような大部の学術書に取り組むことになった。前出の本の内容はもはや忘却の彼方に近いが、骨量のある本への嗜みはこの時に覚えた学恩である。

高校生(君たち)と違って、順調に年齢を重ねている私の場合、目の疲れやかすみが多い。そのしんどさが読書から自分を引き離そうとしているのも腹立たしい。ただ天邪鬼なので、今回は長い話、分厚い本をテーマにした。選んだ三冊(フィクション二冊とノンフィクション一冊)を読んでもらえたら、それらが開国から戦後の時代までの日本の近現代史に対応していることがわかるだろう。読書という個人的な営みの場合なので、勝手な動機についても《敬老の精神》でご寛容のほどを。

もっとも、本(著作物)の価値がボリュームによるわけではないことは当然である。実際、昨年の「図書ニュース」で私が夏目漱石の作品中「読みやすさと歯ごたえのバランスの良さで断然」と書いたのは、手頃感のある『坊っちゃん』だった。漱石の弟子筋の芥川龍之介からは「大作を傑作と混同するものは確かに鑑賞上の物質主義である。大作は手間賃の問題にすぎない」(『**侏儒の言葉**』)とのアイロニーも聞かれる。軽薄はむしろ手取り易い美德であり、重厚はとかくに気が引けるものだ。それでも手間ひまかけた労作が深く、久しい感動を呼ぶ可能性まで全否定はされまい。エネルギーの溢れる若い時に、一遍、分厚い本に取り組んでみよう。

注① **太字の書名**は、図書館に蔵書があることを示す。

注② 以下の(081/I1/24)などという記号は図書館での請求番号を示す。

長編歴史小説を読んでみる ― 島崎藤村『夜明け前』

(岩波文庫) (081/I1-7/24-2.3.4.5)

(筑摩書房「藤村全集」第十一・十二巻) (918/S1/3-11・3-12) 他

授業中に島崎藤村を知っているかを聞いてみたことがある。4分の1くらいの生徒が手をあげてくれた。意外に多いなという印象。国語の授業に出てくるのだろう。では、『夜明け前』を読んだ人はと聞いたら、挙手はなかった。恥ずかしながら、私は今回初めて『夜明け前』を読んだ。

作者の藤村(以下、同じ)の名は歴史の教科書にも出てくる。本校で使用している山川出版社『日本史A』の場合、明治の「近代文学」、そして昭和の「戦時下の文化」の中である。そこには「…既成の作家の中には、せまりくる戦争の足音の中で静かに力強い創作の世界を維持するものも少なくなく、島崎藤村の『夜明け前』… といった大作が書き続けられた」とある。藤村はこの作品を1929年4月から1935年10月にかけて、足掛け7年にわたって執筆、発表した。その構成は、第一部の序の章に始まって、上巻・下巻に計十二章、さらに第二部上巻・下巻に計十四章、そして終の章まで。開国、幕末の動乱から明治維新を描く紛れもない大小説である。

冒頭、「木曾路はすべて山の中である」という一文はよく知られている。続いて「あるところは岨(そば)づたひに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入り口である」とうねるように文体が重なり、「一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いてみた」で最初の段落は区切られる。下線部分を齋藤孝さんに倣って『声に出して読みたい日本語』として音読してみよう。息を整えながら読んでみたら、その先の木曾路の物語を道なりに辿ってみたいと感じるのは私だけだろうか？(フォントを変えた所が引用である)

主人公は青山半蔵。馬籠宿(現岐阜県中津川市)の本陣庄屋間屋を永年務めた古い家柄の出で、復古をめざす平田派国学の門人となった半蔵その人の生涯の物語であり、同時に封建時代から明治の御一新にかけての大変動過程で起きた青山の家の没落史が記される。中山道における馬籠の本陣は慶長6(1601)年以来藤村の実家(島崎家)が世襲しており、彼の父とその一族が作品のモデルとなった。扱われた時代は、半蔵がお民と結婚する嘉永6(1853)年のペリイ来航あたりから、明治19(1886)年の暮れ近い座敷牢内での彼の死期にわたる。藤村は、街道筋の宿場(共同体)での社会関係や人間関係が明治前半期の近代化とともに次第に変容していく様子をも克明に描いた。読めば、何かと教科書をリアルにしてくれる。

例えば、黒船の来航について、「わたしは亜米利加の船を見ました。二度目にやつて来た時は九艘も見ました。左様、二度目の時なぞは三ヶ月もあの沖合に掛つてみましたよ。そりや、あなた、日本の国情がどうあらうと、こつちの言分が通るまでは動かないといふ風に――楨杆(てこ)でも動かない巖のやうな権幕で」という具合。青山家の先祖の地、相州三浦(現神奈川県横須賀市)に住む山上七郎左衛門の言葉である。

あるいは、明治10年代の銀座の風景を描いた錦絵が教科書に載っている。青山半蔵はその現場を訪れた。「… 東京は発展の最中だ。旧本陣間屋時代に宿場と街道の世話をした経験のある半蔵は、評判な銀座の方まで歩いて行つて見て、そこに拵げられた道路をおよそ何間と数へ、めづらしい煉瓦建築の並んだ二階建の家々の窓と丸柱とがいづれも同じ意匠から成るのを眺めた。そこは明治五年の大火以来、木造の建物を建てることを禁じられてから出来た新市街で、最初は誰一人その煉瓦の家屋に入る市民もなく、もし住めば必ず青ぶくれにふくれて、死ぬと言ひ難(はや)されたといふ話も残つてゐる。」錦絵に描かれた文明開化期の緑色の煉瓦建造物を見直すと、必ず青ぶくれるという理由がわかった気がする。

また、四民平等の世となり、平民も苗字を許されたという実態はこう語られる。これまで青山家で働いて来た下男(しもや)の佐吉が、屋台骨の揺らいだ旧家(ふるや)にいいよ長い暇(ひま)を告げ、隣村(となりむら)に帰(かへ)って嬬(かまど)を貰(もら)って竈(かまど)を持(も)ちたいと言(い)った時の言葉。「旦那(だんな)半蔵、お前(まへ)さまに折(か)り

入つて願ひがある」「お前さまも知つてる通り、俺には苗字がない」「見さつせれ。皆と同じやうに、俺もその苗字が欲しいわなし。お前さまのやうな人にそれをつけて貰へたら、俺もかうして長く御奉公してきた甲斐があるで。」…「就いては、格別やかましい姓を名乗りたいではないが、自分の代から始めることであるから、何か自分に縁故のあるものを欲しい。日頃本陣の北に当る松林で働いて来た縁故から、北林の苗字はどうあらうかと言ひ出したので、半蔵は求めらるゝまゝに北林佐吉としてやつた。… 帰つたら早速その旨を村役場に届け出でよとも勧めた。」なるほどそういうものか、と納得。このようなりアリティー倍増の場面は全編そこに見出される。

歴史の様々な伏線を経て、悲劇が第二部第九章の末尾以降、膨大な物語に読み疲れて重くなった眼に飛び込んでくる。先ず婚礼を直前に控えた半蔵の娘お糸の自刃である。「… 見ると、お糸がみない。それから家のものが騒ぎ出して、半蔵と佐吉とは提灯つけながら土蔵の方へ急いだ。おまん(半蔵の継母)も、お民(半蔵の妻)もその後が続いた。暗い土蔵の二階、二つ並べた古い長持の側に倒れてみたのは他のものでもなかつた。自害を企てた娘お糸がそこに見出された。」次いで第十一章に出てくる半蔵自身が起こした明治天皇の行列への「猷扇、事件。そして、第十四章の青山家に縁故の深い万福寺を「あんな寺なぞは無用の物だ」と、本堂の障子に点けた放火事件である。三つとも思わず息を呑む急展開であるが、それらの事件の理由について、作者は用心深く全てを語らない。家族によって座敷牢に入れられてなお半蔵が最後の抵抗の振舞をやつてのけた後、万事が終わる。半蔵と日本にとって夜は明けきっていないままだ。

前に教科書との関わりから皮相に見える例ばかりを挙げたようだが、この大作の面白さは本当に一様ではなく、読書の味わいは深かった。多少難しい字句にも出会うが、その度に調べるよりは、長文なので前後から推量して読み進めるとよいと思う。終りが見えた時には切なさが迫ってくるはずである。

最後に、藤村は自身が生まれる20年ほど前から始まるこの歴史小説を、『大黒屋日記』他、多くの資料をもとに創作した。彼は第一部の改版後にこう書く。「なお、今後とても作者としての反省を失わずに、機会あるごとに改むべきことは改めていきたい考えである。自分らの欠点を改善し、また自分らの過誤を除去することは、実に自分らの幸福と言わねばならない。」背筋の伸びる言葉だ。

ある家族の年代記を読んでみる — 北杜夫『楡家の人びと』

(新潮社「北杜夫全集」4) (918/K26/1-4)

名作には、作者という個人と同時に社会が語られる。それが読みつがれるのは、さらに時代を超えるものがあるからだ。この「普遍性」こそ名作の強みである。

名作『楡家の人びと』は作者の北杜夫さんにとって(困難を乗り越えてでも)書かれるべくして書かれた作品だった。傾倒するトーマスマンの『ブッデンブローク家の人びと』が描く《ある家族の没落》を契機として、ほとんどの登場人物は斎藤家という作者をめぐる現実の一族の人々をモデルにして描かれる。発表は1962～1964年にかけて。原稿用紙にして千五百枚以上、それぞれが十章からなる三部構成となっている。作者は、親類の間をめぐって昔の聞き語りをとり、大正年間の新聞の抜き書きを作りなどして、小説の世界へと筆を進めた。

実際に、「この夏の米騒動以来」とか、「この九月には寺内内閣が倒れ、最初の平民宰相原敬があとを継ぐ」とかいった歴史事象が最初の方に出て来る。また、イガグリ坊主の頭のとっぺんがちょっと突出しているところから「ビリケンさん」と呼ばれ、新聞を節をつけて朗読する楡病院の入院患者が登場する。ビリケンとは明治時代の末以来流行した人形の名称で、加えて寺内正毅前首相の渾名<ビリケン(非立憲)宰相>でもあった。現在は通天閣の中にいるビリケンだが、当時はそう呼ばれた人が世の中にいくらかもいたわけである。

この市民的な作品の第一章が、日本の市民文化が形成されていった大正時代から始められていることは偶然とは言えない。楡家一族 — 楡基一郎・龍子・徹吉(作者の父、歌人の斎藤茂吉に相当)・聖子・歐洲(おうしゅう)・米国(よねくに)・桃子・藍子・周二(作者自身に相当)らや、下田の婆や、さらに「院代」の肩書を有する勝俣秀吉等々、多彩な人びとが昭和の前半期(～終戦直後)にかけての時代の風俗と変遷の中で生きて、そして死んでいく。

これらの群像の中で圧倒的に魅力のある俗物として描かれているのが、楡病院帝国脳病院初代院長で「ドクトル・メジチーネ」の楡基一郎である。彼は決して怒らない、あるいは怒った気色を露ほども顔に現わさない男で、猫にだって誰にだって愛想がよかったと紹介される。すぐれた臨床医と評してもよいその診察ぶりを原文のまま見てみよう。

「基一郎は普通の診察のほかに患者の頭に聴診器をあてるのである。心臓の音や肺臓の呼吸音をきくときと同じように頭を聴診するのである。そして院長は自信にみちて患者に告げるのだ。『いや、君の脳はわるい。たしかにわるい。ぼくのあげる薬をのみなさい。これは日本一の薬なんだから』 … 『ぼくはねえ君、ドクトル・メジチーネでねえ、専門家、オーソリティなんだから』 … そしてその結果、… 院長は断然彼ら(患者たち)の信頼をかちえてしまうのである。まっとうな診察、正当な理論的な説明よりも、ずっと患者たちはこのカイゼル髭を生やした小男の医者信用し、また癒りも早いのである。なんにしても不思議な人物なのだ、この楡基一郎という男は。」
因みに、楡基一郎という姓名そのものが自らのハイカラ感覚によって創造されたものだった。

物語の最終場面に跳ぶ。敗戦後の荒廃の中で、もはや誰一人として頼りになる家族(夫も、子供も)はいない。だが、基一郎の血を引く長女で、楡病院の再興を期す「龍子の心は決してしばみ萎えはしなかった。… 負けてはならなかった。たとえ他の者がどんなにだらしなかるうとも！ 理不尽な怒りにかりたてられ、龍子は衝動的にきびきびと席を立った。」

時の移ろいとユーモアと宿命を感じさせるこの長い作品の終わらない余韻を聞く思いである。

長編ノンフィクションを読んでみる — 後藤正治『天人・深代惇郎と新聞の時代』

(講談社) (289/G18/1)

もともと後藤正治さんの書くノンフィクションは好きだった。過去にも何冊か読んでいる。働く若者や、ボクサーを始めとする様々のスポーツ選手など、丹念な取材を重ねる執筆態度と対象への柔らかな視線が一貫している。『天人』は昨 2014 年に出版されたばかりの新しい作品である。序章・十三の章・終章からなり、350 ページ以上のボリュームがあるが、感嘆しつつ読み進めた。

表題のように、朝日新聞のコラム「天声人語」を 1973～1975 年の 3 年弱執筆した深代惇郎さんを書いたもの。社の内外にわたる広い交際範囲から取材されているが、衆目の一致するところ、毎日書くコラムニストとしての深代さんは別格の書き手であった。人柄、広範な知識と教養、優れたバランス感覚、豊かな情念、そして素晴らしい表現力。一例に、小学校 5 年の男の子が自殺した母親を悲しんで後追い心中した事件後の文章末尾を引く。— 『みんなが親切にしてくれへんかったせいや』という竜司君の遺書が、読む者を打ちのめすのだ。(1974 年 4 月 10 日)

著者の動機には、昨今、その地位に揺らぎが見える新聞への思いもあった。世の中に真実を伝え、人々に明日のためになすべきことを考えさせるジャーナリストの<手仕事>の重要性は変わらない。新聞を愛した人、深代さんを描くことで新聞の意味を再確認したい、そう思った。そして、彼のようなコラムニストも時代の中から生まれたものであろうから、本書は一人の新聞記者を通してたどった戦後の新聞史でもあるという。

蛇足だが、著者は大阪府立高校の出身で、京都大学農学部に進んだ人である。北野生が共通項を感じつつ、後藤さんの他の作品【『ラグビー・ロマン』・『生体肝移植』】をも読んでもらえたら幸いである。また、『天声人語』も収録、刊行されたものが図書館の蔵書に入っている。